

# スポーツの雑学

船富公二

## I 「アマチュア」

### (1) エリス少年伝説の真偽

ラグビー界には、ラグビーの発祥に関わる伝説があり、今も語り継がれている。

イギリスの名門パブリック・スクール＝「ラグビー・スクール」のグラウンドの壁には

『この銘板は、1823年に、当時行われていたフットボールのルールを見事に無視してボールを両腕に抱えて走り出し、それによってラグビーの際だった特徴を創出した W・W・エリスの功績を称えるものである。』と、記されている。

しかし、最初にボールを持って走った(ランニングイン)のは「エリス少年」という確証はない。ラグビー・スクールの同窓会が1895年に調査委員会を立ち上げ、懸命な調査を続けたが確たる証拠は得られなかった。にも関わらず、1900年にラグビー・スクール同窓会の手でこの銘板が埋め込まれた。

調査委員会を立ち上げた1895年は、「プロ化容認問題」を巡って、RFU(ラグビーフットボールユニオン)が分裂した年なのである。

### (2) 「プロ化の波」

FA(フットボール・アソシエーション)もRFU(ラグビー・フットボール・ユニオン)も幹部は、創立直後から、予想もしていなかった「プロ化」の流れに遭遇する。

パブリック・スクールなどの名門スクールの卒業生を中心としたジェントリー(中・上流層)が主体の両組織の幹部は、当初、「プロ化」の要求に反対する。しかし、イングランド中・北部に誕生した教会信者や労働者で組織されたチーム数はジェントリーらの数を遙に凌駕するまでになり、彼らは「プロ化」への要求を日増しに強くする。

ジェントリー：債券利息や地代を収入源とする特権階級。スポーツは豊かな生活を謳歌する手段。

教会信者・労働者：労働によって生る糧を稼ぐのが日々の生活。

試合当日の日当や負傷時の生活保障をチームに要求。

チームは有料で観客を集める。

「プロ化」の流れに対し

FA は組織の分裂を避けることを優先して 1885 年にプロ化を容認する。

RFU は反対を貫き、1895 年の分裂を迎える。

### （3）プロ化の進行に抗う「フェアプレー」

FA 式フットボールでは、1880 年代はプロ化が進行していたが、時流に逆らうようにパブリック・スクールの卒業生が中心になって結成した「コリンシアン・カジュアルズ」というアマチュアの強豪クラブでは、「自分たちが反則を犯して相手チームにペナルティ・キックを与えると、あえてゴールキーパーをはずしてゴールをがら空きに」した。

「犯した反則の結果を潔く受け入れずに、ゴールキーパーを使って相手の得点を防ごうとするのはフェアでない」から、というのがその理由であった。

19 世紀のイングランドでは、「アマチュア」という言葉は、金銭をもらってスポーツをするのではない人だけでなく、スポーツを楽しむ中・上流のジェントルマンを意味していた。さらに、アマチュアはフェアプレーを大切にする人であり、フェアプレーというのは、競技のルールを守るという当たり前のこと以上に大事なのはどんな場合でも相手と対等の立場でゲームをするということであった。したがって、明らかに有利な立場に立って相手を出し抜くのはフェアプレーがもっとも嫌うことであった。

FA 幹部は「プロ化」を容認したものの、スポーツのアマチュアイズムとフェアプレーを吹聴し続けたのである。

## II ジェントリーの支配

### （1）ジェントリーのイギリス支配

「近代のイギリス議会を支配し続けたのはジェントリー階級である。」と言われている。

ジェントリーとは、もともとは、15～16 世紀以来のイングランドの大地主のことで郷紳とも呼ばれ、元来はジェントルマンの集合名詞で、貴族とヨーマン（中産農民・自営農民）の中間に位置した階

層であった。しかし、バラ戦争（英仏戦争）や黒死病によって激減した貴族を補填し、地主・貴族階級を形成してイングランド政界に君臨するようになる。

世界に先駆けて 17・8 世紀には商業革命を達成したイギリス資本主義社会を支配してきたのが封建勢力！なのである。

中村敏雄氏も高津勝氏（運動文化研究 35）もサッカー、ラグビーの成立史を論じるとき、当時のイギリス社会の政治・経済史の吟味を怠り、資本主義社会＝ブルジョアジー主導と捉え、パブリック・スクールをブルジョアジーの師弟の学校と捉えている。

## （２）フランスとイギリスの相違

フランスは、1789 年から 99 年のブルジョア革命によって封建的な残存物の一掃がなされた。旧支配者（宗教家・君主・貴族）と新興ブルジョアジーとの決定的な対立が資本主義革命を完遂させたと言える。

しかし、イギリス（連邦）には今も王室が存在し、ジェントリーは 19 世紀末まで議会政治の中枢をなしてきたのは何故か？それは、

① 17 世紀の名誉革命（無血革命）によって、国王が「権利の章典」を承認し＝「国王は、君臨すれど統治せず。」となり、イギリス議会が政治の中枢を握ったこと。

② 議会政治は、貴族家の激減によって、ジェントリー階層が担ってきたこと。（ジェントリーは貴族のように固定身分でなく、市民層でも富を蓄え没落地主の土地を購入してジェントリーに成り上がることができたこと（＝ジェントリーのブルジョアジー取り込み作戦）。

③ 植民地からの膨大な利益は、新旧勢力間で分配できたこと。

④ 幾度もの新旧勢力の対立もジェントリー側の譲歩で矛盾を激化させなかった。（譲歩することができた。）からである。

## （３）植民地との交易のイギリス資本による占有体制

○1534 年：ヘンリー 8 世は、宗教改革（国王至上権）によって、絶対王政と重商主義・植民地政策の財政的基盤を固める。（ローマ教皇に納められていた教会税も、解散した修道院の土地も国王のものに。）

○1588 年スペイン無敵艦隊を撃破し、公海上の覇権を獲得。

○1651 年クロンウェル航海法で中継貿易からオランダ人を排除。

イギリス資本による植民地との交易の独占体制（重商主義・植民

地体制)を築きあげる。

↓

○1640年から1770年までに輸出量で6~7倍、輸入にいたってはそれ以上の発展を遂げ、貿易相手国もヨーロッパ内の地域から非ヨーロッパ地域へと一挙に広め、「商業革命」を達成するのである。

#### (4) 文化的ヘゲモニーとしての「紳士道」

資本主義の現代社会代においてもイギリスを「『紳士』の国」と呼ぶなど、「紳士」のダンディズムに憧れる人々が未だに存在する。これは、ジェントリーが「名士ジェントルマン」の理念を創り上げ、工業化が進む18・19世紀にまで自らの支配権を維持し続けてきたからである。小林章夫氏によれば、

「『紳士』には紳士にふさわしい生き方(=『紳士道』)があることを吹聴した。それは、『騎士道』に由来し、身分としての『騎士』が曖昧となり『ジェントリー』階層に含まれる過程で、『騎士道』も『紳士道』へと変化し、名士=ジェントルマンの理念が創り出されたのである。」(『イギリス紳士のユーモア』)

騎士道：何事に対しても勇氣と正直とをもってあたり、思いやりと礼儀正しさを大事にし、一朝ことあらば、真っ先に戦場に駆けつける義務感(ノーブレス・オブリージュ)を大切にした。

紳士の生活：田舎に住み、表面的な飾りよりは実質を大事にし、何事にも自然に振る舞い、大らかなユーモアと愚直と思えるような正直さを兼ね備えた「カントリジェントルマン」。スポーツで身体を鍛え、フェア・プレーの精神をことさら吹聴し、時折、それでも都会の空気を吸って、悠々たる態度で日々を過ごした。(同)

#### (5) 商業革命→変貌する農村の生産関係

ジェントリーは、村落共同体の「父(=家父長)」として、君臨し、農民との間に主従関係を築き維持してきた。多くの使用人をグレートハウスと言われる屋敷内に住まわせ、我が子の教育も大学教授なみの人物を家庭教師として住まわせていた。(一方学者にとってもジェントリーが保有する書籍が魅力)

しかし、商業革命の進行は、地主の農業経営を圧迫するようになり、中小地主は没落し、大地主は国債や植民地への投資の利子によって(農業収入ではなく)富を蓄える。

没落地主の土地は、①大地主（ジェントリー）が購入、②「成り上がり者」から「名士の家柄」をもとめるブルジョアジーが買い取り「新ジェントリー」へと引き継がれる。

大地主は廣大化した土地を借地農業経営者に貸し付け、地代や利息収入を主とするようになり、多くの使用人は（一部を除いて）解雇された。一方で、新興ブルジョアジーをもジェントリー「階級」に取り込むことに成功する。

### Ⅲ パブリック・スクール

#### （１）「パブリック・スクール」って、有名私学！？

サッカー（FA）やラグビー（RFU）の誕生に深く関わったラグビー校やイートン校は、パブリック・スクールのなかでもザ・ナインズと呼ばれる有名私立校だ！ってこと、ご存じですか？

「パブリック」だから、公立でしょう！と、思われる方も多いようで、2018年の同志会滋賀大会のサッカー分科会でもそう思われている会員がいました。

「パブリック・スクール」の起源は中世のグラマースクールに遡るが、これらの学校の中で王侯貴族や金持ちの基金をもとにした学校があらわれ、これらの基金立学校は詳細な規則のもとに運営されており、一定数の貧しい家庭の子弟を無償または安い授業料で入学させることを義務づけていた。」（修道士養成＝たのスポ 2012.7.8月合併号の拙稿）

この「公的な義務」から「パブリック」スクールと呼ぶようになったようです。イギリスには大雑把な表現も多く、中世のフットボールもその一つで、当時足よりも手の方が主であったのに「フットボール」と呼んでいるのもその例です。

#### （２）パブリック・スクールの建設ラッシュ

商・工業の発達によるインフレの進行は、基金立学校として発足したパブリック・スクールの経費超過を招き、その改善のために私費制をとることになった。16世紀にはもう私費制の方が多くなり、17世紀にはこれまで邸宅に家庭教師を雇って教育していた貴族やジェントリー（地主階級）が子弟をこれらの学校に行かせ始めるようになり、パブリック・スクールは上流階級のための学校と変貌す

るのである（スポーツの雑学Ⅱ参照）。

一方で、購入できる土地もなくなり、「エセ・ジェントルマン」獲得手段は、「パブリック・スクール OB」へと移行し、19世紀になると、産業ブルジョアジや専門職が増え、既存校をモデルにした寄宿制の学校が空前のブームとなる。ラグビー校校長トマス・アーノルドは、中流階級の人びとの求めに応じて彼らの子弟の多くをラグビー校に受け入れ、貴族の子弟の入学を断ったのである。

### （3）フットボール・ルールの成文化第1号はラグビー校

1863年にフットボール・アソシエーション（FA＝サッカー協会）が結成され、近代スポーツとしてのサッカーが誕生する。その契機は1845年のラグビー校によるフットボール・ルールの成文化である。

下記が19世紀中頃の諸団体によるルール成文化の推移である。どうして成文化の主体はパブリック・スクールなのか？なぜ、ラグビー校が第1号なのか？これは偶然ではないのである。

フットボール・ルールの成文化の年代

学校・クラブ名	年代	学校・クラブ名	年代
ラグビー校	1845	シェフィールドクラブ	1857
イートン校	1847	アッピンガム校	1859
ケンブリッジ大学	1848	チャーターハウス校	1860年代
ハロー校	1853	ウィンチェスター校	1863
ウェストミンスター校	1850年代	フットボールクラブ	1863

中村敏雄「スポーツのルール学への序章」 p 99（I.Rモアによる）から

### （4）暴力事件が多発 スクール改革へ

19世紀の初頭には、寄宿制のスクール内で生徒間の暴力事件が多発していた。原因と考えられるのは、①スクール内の慣行（＝上級生が監督生として寮の自治、生徒会の運営権を持っており、また、下級生は上級生の身の回りの世話をするという「プリフェクト制度」もあり）が、上級生による下級生イジメの温床にもなっていた。②19世紀に急増した寄宿制の学校の質の低下で、学校内の秩序が保たれなくなった。

貴族・ジェントリー：「将来の指導者、植民地における総督等に成るための訓練の場」として・・・容認

ブルジョアジー：時代遅れ、秩序ある社会の成員と成るためにもスクール改革を要望。

学校改革を最初に行ったのは、ブルジョアジーの師弟を受け入れていたラグビー校のアーノルド校長であった。

## IV フットボール・ルールの成文化

### (1) ラグビー校校長アーノルドの学校改革

パブリック・スクールにおいて最初に改革に乗り出したのは、ラグビー校のトマス・アーノルドであった。山本浩氏は、「アーノルドが行ったのは、プリフェクト制度を正式に認め、みずから最上級生の中から監督生にふさわしい生徒たちを選んで任命し、彼らに監督生としての責任を自覚させたことであった。その結果、自覚を促された監督生と最上級生全体は学校内でエリート的存在になり、下級生に対し『クリスチャン・ジェントルマン』としての道徳的模範を示すようになった」(フットボールの文化史)と、述べている。

また、アーノルドは、改革を進める過程で、「団体スポーツ」の有用性に着眼し、生徒たちが遊んでいる「乱暴なフットボール」をきちんと組織された団体「スポーツ」に改良することで、生徒たちの人格陶冶に役立てようとしたのである。

ラグビー校の教師たちは、上級生の手を通して、フットボールを秩序あるスポーツにつくりかえさせようとした。そして 1845 年に三人の生徒によって、最初の成文化されたルールがつくられた。

### (2) 成文化された二つのルールの「ねじれ現象」

世論に押され、イートン校も学校改革に取り組み、フットボールのルールの成文化を行う。

下記の表はラグビー、イートン両校の 1800 年当時の生徒の遊びとして行われていたフットボールのルールと成文化されたルールを比較したものである。(次ページ)

	1800年当時のフットボール・ルール	成文化ルール
ラグビー校	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ゴールラインに下級生を並べる</li> <li>・ランニングイン（ボールを抱えて走る）は禁止</li> <li>・ハッキングは茶飯事</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・暴力の比重の減少</li> <li>・オフサイド、スクラムの定義は曖昧</li> <li>・ランニングインは容認</li> </ul> <p>（現在のラグビーへ）</p>
サッカー校	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2種類のフットボール（ウォールゲームは略）</li> <li>・広い運動場の四隅の旗を立て、タッチラインはなし</li> <li>・プレーの中心はロングキックとスクラム。</li> <li>・2本の柱の間に蹴り込めば得点。または、ゴールラインの向こう側の地面にボールを抱えてタッチするとゴールをねらって蹴ることができる</li> </ul> <p>（現在のラグビーに似ている）</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ランニングインの禁止</li> <li>・ゴールはクロスバーの下でゴールポストの間を通す</li> </ul> <p>（まるで現在のサッカー）</p>

ねじれ現象！

### （3）ねじれ現象のなぞを推測する！ラグビー校の場合

ラグビー校がフットボールのルールの成文化過程において、ランニングインの「禁止」から「容認」への変更の意図は容易に推測できる。『手でボールを扱うことのできるフットボールの方が、「勇敢さ」「不屈の精神」「無私の献身」「チームワーク」を必要とするので生徒たちの訓練にふさわしい』と考えたのであろうと。

フットボールの成文化は、そもそもパブリック・スクールの教育改革の過程でうまれてきたものであり、生徒の心身の鍛練のためにルールも変更されてきたのであって、その意味ではラグビー校の変更の流れが本流と言える。19世紀後半のパブリック・スクールにおいては、ラグビー校方式のルールを採用する学校が多かったことがそれを物語っている。（資料略）



では、なぜイートン校は「逆流」的なルール改革を行ったのか？

#### (4) イートン校、なぜ逆流のルールへ

1800年当時のイートン校のフットボール・ルールはランニングインを容認したものであった。それは、「強靱な身体づくり」にうってつけのルールであったはずである。何故、身体の接触プレーのないキック主体のルールに変えたのであろうか。山本浩氏は「…イートン・コレッジは…二番目に古い名門校であり、生徒たちは貴族やジェントリーといった上流階級の子弟が中心であった。…ラグビー・スクールは…他に先駆けて改革を断行し、多くのパブリック・スクールの改革のモデルとなっただけでなく、…新興の中流階級の子弟を多く受け入れていた」「…歴史をもつ名門パブリック・スクールであるイートン・コレッジの側にラグビー・スクールへの対抗意識が強くあり、その意識がラグビー・スクールとは異なるフットボールをもたせることになったようである。」(フットボールの文化史)と、述べている。

#### (3) ルールづくりに込められたジェントリーの願い

ラグビー、イートン両校だけでなく、多くのパブリック・スクールや新しい寄宿制の学校での学校改革の取り組みは、ランニングインをめぐる相違点はあっても、幾つかの共通点をもっていた。

それは、フットボールのルールづくりとその成文化は生徒自らの力で行うことが重視され、作成されるルールにおいて強調されたのはフェアプレーの精神であったことである。

これらは、ジェントリーたちの「我が子の人格形成への願い」(=『体・知・徳』を兼ね備えた人間に育つこと)が込められている。

基礎学力を軽視する我が国の教育政策が恥ずかしく思えてならない。

## V ⑱ 統一ルールづくり

### (1) 統一ルールづくりの1番手はケンブリッジ大

ルールの統一化への試みが、何故ケンブリッジ大で始まったの

か？そのわけは以下のように推測できる。

① 資本の原始的蓄積（農村分解）の進行で、中世以来フットボールを担ってきた農村における共同体が崩れ、民衆によるフットボールが廃れて、パブリック・スクールの生徒の遊びとして残っていた。

② 学校改革の過程でフットボールが「人づくり」の手段として活用され「ルールの成文化が進められた。

③ 学校改革のためのフットボールなので対外試合を念頭においていなかった。

④ 各パブリック・スクールの卒業生がオックスフォード大やケンブリッジ大へ進んだとき、ルールの統一が必要になった。と、考えられる。

しかし、ケンブリッジ大において 1848 年にルールの統一化がなされているが、なぜ、オックスフォード大では行われなかったのか？わからない！

## （２）最初の統一ルール＝ケンブリッジ・ルールができる過程

○ 1839 年にアトサ・ベルという学生がラグビー校出身の学生を集めて最初のフットボール・クラブを組織している。ラグビー校の最初の成文化（45 年）以前の 39 年の時点でも既にランニングインを認めるルールであったようである。

○ 出身校ごとにルールが異なり、ケンブリッジ大内では混乱を招くことが多かったようだが、イートン校式を支持する学生とラグビー校式を支持する学生との対立が鮮明になっていった。

○ 双方の決定的な相違点は、ランニング・イン（ハッキングも）を認めるか否かであるが、40 年代後半には、ラグビー校式に対して「長々と続くスクラム」や「相手プレイヤーの脛を蹴り上げる行為」への批判がイートン校支持派から出されるようになっていた。

## （３）ケンブリッジ・ルールは現在サッカーの元祖

○ 1848 年にイートン・ハロー、ラグビーなどのパブリック・スクール 6 校の卒業生二名ずつと、パブリック・スクールの卒業生でない二名の計十四名で妥協点を探るための「委員会」がつくら

れた。

○ 話し合いによる調整は難航したが、パブリック・スクールの卒業生でない二人の委員のリードで決着をみる。これが「ケンブリッジ・ルール」と呼ばれるもので、フットボールの歴史上重要な意味をもつものである。

○ 1848年の「ケンブリッジ・ルール」を書き留めたものは現存していないが、どのような内容であったのかは知られており、主な点は、①ハッキングやトリッピングは禁止。②キャッチしたボールを蹴ることは許されたが、ボールを抱えて走る（ランニングイン）ことは認められなかった。③手でボールに触れるのは、蹴られたボールをフェアキャッチする場合とボールを止める場合だけであり、これ以外は一切認めない。

○ ラグビースクール卒業生たちは自分達のフットボールに固執したし、同大学内では他のルールによるフットボールも行われたが、1848年の「ケンブリッジ・ルール」は、次第に受け入れられ、大学内のコレッジ対抗試合などが行われるようになっていった。

#### （４）パブリック・スクール OB によるクラブ・ハウス

○ 大学を出て社会人になった者のなかには、社会に出てからも引き続きフットボールを楽しみたいと思い、同好の士を募りクラブを組織するようになる。

○ 自費（会費）でグラウンドやクラブ・ハウスを設け、同好な者たちの社交の場ともなった。

○ 多くのクラブは、同一のパブリック・スクールの卒業生によって組織されたものも多く、これらのクラブは、「オールド・ボーイズ・クラブ」と総称された。

## VI F.A.の誕生

### （１） フットボールの普及

○ 交通の発達もあり、フットボールは地方へも伝わり、19世紀後半にはパブリック・スクールや大学だけのものではなくなり、より広範な人びとのあいだへ普及していく。

○ イングランド中部の都市シェフィールドで、クリケット・クラブの一部のメンバーが集まって、1857年にシェフィールド・フッ

トボール・クラブ（運営委員はパブリック・スクールの卒業生ではない）がつくられている。

○ 1862年にはロンドンの緑地でフットボールを楽しんでいた人びとによってバーンズ・フットボール・クラブがつくられ、この頃には、ロンドン南郊のシドナムでクリスタル・パレスの従業員たちによって「クリスタル・パレス」というチームが生まれている。

○ これらは、イートン・コレッジやハロー・スクールやケンブリッジ大学の系統に属するフットボールを行うクラブであった。

## （2）ブラックヒース・フットボールクラブ

○ 一方で、ラグビー・スクール式のフットボールをプレーするクラブも誕生した。最古のラグビー・クラブで現在もなお有力なクラブとして存続しているブラックヒース・フットボールクラブが1860年に誕生している。

○ ハッキングについては、背後からのもの、膝から上へのもの、ボールを持っていないプレーヤーに対するものは禁止されたが、それ以外は認められている。（これが重要）

○ 他にも1857年にリバプール・フットボール・クラブ、1860年にマンチェスター・フットボール・クラブがつくられている。これらは、ラグビー校出身者が故郷へ戻り広めたものであった。

## 3）フットボール・アソシエーションの誕生

○ 各地にフットボール・クラブが誕生し、たがいに試合をするようになるのと、ルールの統一が緊急な課題となってきた。

○ バーンズ・フットボール・クラブ（スポーツの雑学VI②参照）のキャプテンであったE・C・モーリーの呼びかけで、ロンドンに所在する十一のフットボール・クラブ（①フォレスト、②ノー・ネイムズ、③陸軍省、④クルセイダーズ、⑤クリスタル・パレス、⑥ケンジントン・スクール、⑦サービトン、⑧バーンズ、⑨ブラックヒース、⑩ブラックヒース・スクール、⑪バージヴァル・ハウス・スクール）が1863年10月26日に集まった。（他にオブザーバーとしてチャーターハウス・スクールの一名と個人の関係者多数）そして、フットボール・アソシエーション（F・A）の設立を決める。

○ 希望するクラブの全てが加入できて、1ギニーの会費を納入することで会員資格を1年ごとに更新できる。

#### (4) FA ルール決定へのモーリーの意図

○ 11月24日に開催されたFA特別会議に、モーリーが提出した14条のルール案は、両派の折衷案。(フェアキャッチ時はボール持って走っても良いが、同時に2つ以上のラフプレーを重ねることは禁止。フェアキャッチしたとき、ボールをパスすることも認めていた。)

○ しかし、モーリーは草案提出時に参考として「ケンブリッジ・ルール」も出席者全員に配布しており、出席者の多くは、モーリー草案よりも「ケンブリッジ・ルール」の方に傾斜していった。

○ 12月8日の会議では、ランニングイン、ハッキング、手によるパスも認めないかたちに手直しされていた。

○ ブラック・ヒース・クラブの代表キャンベルは「ハッキングこそ『フットボールの真の形式』であり、『もしハッキングを廃止するなら、フットボールという競技がもつ勇敢さと気力をことごとく奪ってしまうだろう。』と主張。

○ これに対して、草案提出者のモーリーは「思慮分別のある年齢になった人は誰でも、ハッキングのあるフットボールなどしないと思う。そんなフットボールをするのは、結局は学校の生徒たちだけだろう。」と言ってハッキング禁止を支持した。(「ケンブリッジ・ルール」を配布していたモーリーの意図)

#### (5) 1863年 FA 統一ルール

○ わずか13条の簡単なルール

○ グラウンドの広さは、縦は最長で200ヤード(約183m)で、横は最長で100ヤード(約91m)と現在よりかなり広い。

○ ゴールは、8ヤード(約7.3m)の間隔で2本のゴールポストの間で、現在と変わっていない。クロスバーはなく、ポストの間かその上空の通過で得点

(ゴールは手で投げたり、ボールを叩いたり、持ち込んだりすることなく、)

○ トスによってコート、キック・オフの選択でゲームを始めるが、

ゴールが決まるたびにコートチェンジ。

○ボールがコート外に出たとき

タッチを出たとき：

ゴールのポストの間かその上空を通過したときに認められる（バーなし）

○5条：スローイン＝ボールが境界線からタッチに出たときは、タッチに出たボールを最初に触ったプレーヤーが、境界線上で出たところから境界線に対して直角にグラウンドに投げ入れる

○6条：オフサイド＝あるプレーヤーがボールを蹴ったとき、そのプレーヤーより相手側のゴールラインに近い位置にいる同じチームのプレーヤーは「アウト・オブ・プレー」となる

## （6）R F Uの結成とルール 上流階級のセクト問題

F Aを脱退したラグビー校式フットボールのクラブは、1871年1月26日に二十一のクラブでR F U（ラグビー・フットボール・ユニオン）を結成した。

同年6月22日に59箇条からなるルールを決定した。（F Aは13箇条）

特筆すべきは、「ハッキング」と「トリッピング」が禁止されていることである。ブラック・ヒース・クラブの代表キャンベルがF Aの脱退時に述べた文言は「ハッキングこそ『フットボールの真の形式』であり、『もしハッキングを廃止するなら、フットボールという競技がもつ勇敢さと気力をことごとく奪ってしまうだろう。』で、あったにもかかわらず！

これは！社会状況の変化が！

### ① 一外科医からのタイムス紙への投書

ラグビー・スクールで行われたフットボールの試合での怪我人のリストを示し、「これらの怪我のほとんどはハッキングによるもの」と主張。

この投書がロンドンのいろいろな新聞に転載され、ハッキングへの批判が強まった。

### ② リッチモンド・クラブの練習中に一人のプレーヤーが死亡。

これらの状況下で、ルール変更を余儀なくされたことによると考えられる。

F Aの幹事は生粋のジェントリ（地主層）である。R F Uの幹事はジェントリーのなかでは比較的新しい勢力（新興ブルジョアジーが土地を購入して新ジェントリーに成り上がった地主）である。にも関わらず、プロ化容認問題やフットボールのルールにおいては、R F Uの方に上流階級としてのセクト主義が強いのはなぜか？次回からは両組織のルール等の変遷を比較しながら考察したい。